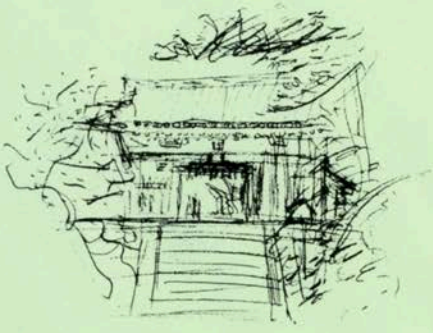
富田林の文化財

富田林市教育委員会

正　誤　表

頁	行	誤	正
36	17	• 製作年代	• 制作年代
40	18	• 朝鮮通信史（ちょうせんつうしんし）	• 朝鮮通信使（ちょうせんつうしんし）
	21	• 朝鮮通信史	• 朝鮮通信使
55	写真説明	• 北東の廿山方面から	• 北西の廿山方面から
65	写真説明（下）	• 町並み（東から）	• 町並み（西から）
66	3	• 酒り造屋	• 造り酒屋

お亀石古墳



龍泉寺仁王門

旧杉山家住宅

はじめに

富田林は古くから南河内地方の中心地としてひらけ、古い歴史と伝統をもち、さまざまな歴史的遺産も数多く残されています。

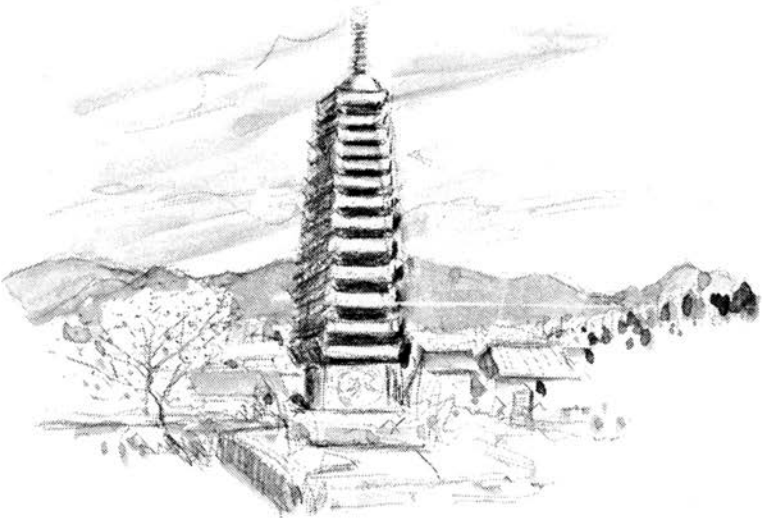
現代に生きるわたしたちは、地域に根ざした文化財をみずからの貴重な財産として保存・活用し、後世にわたって守り育てていくのが責務であるといえましょう。

今回刊行いたしましたこの冊子は、前回の第1刷に改訂を加えたものですが、これによって本市における文化財に対する関心と認識を一層深めていただき、その保護・保存にご協力をお願いするしだいです。

おわりになりましたが、本冊子の刊行にあたり執筆・校閲等の労をおとりいただいた諸先生方、そして調査・取材・資料提供などに多大なご協力をいただきました関係者の皆様に対し、ここに記して感謝の意を表します。

平成元年3月

富田林市教育委員会
教育長
西尾典次



板持の十三重層塔

もくじ

カラー写真（お亀石古墳）…… 1
カラー写真（龍泉寺仁王門）…… 3
カラー写真（旧杉山家住宅）…… 5
はじめに…… 7
もくじ…… 9
① 錦織遺跡……10
② 喜志遺跡……12
③ 中野遺跡……14
④ 甲田南遺跡……16
⑤ 廿山古墳……18
⑥ 彼方丸山古墳……20
⑦ 田中古墳群……22
⑧ 新堂廃寺……24
⑨ お亀石古墳……28
⑩ オガンジ池瓦窯跡……30
⑪ 龍泉寺……34
⑫ 美具久留御魂神社……38
⑬ 滝谷の不動尊と二童子立像……42
⑭ 浄谷寺の石造地蔵菩薩と板碑……46
⑮ 中佐備共同墓地の宝篋印塔と
板持共同墓地の十三重層塔……50
⑯ 嶽山城址……52
⑰ 錦織神社本殿と摂社……56
⑱ 興正寺別院……60
⑲ 富田林寺内町……62
⑳ 旧杉山家住宅……66
㉑ 仲村家住宅……68
㉒ 東高野街道錦織一里塚……70
㉓ 水郡邸……74
富田林の文化財年表……76
富田林の文化財分布地図

1 錦織遺跡

近鉄長野線滝谷不動駅下車北へ徒歩10分

錦織遺跡は、近鉄滝谷不動駅北東の低位段丘上にあります。遺跡のほぼ中心を旧国道170号線が通っていて、東西約300メートル、南北約900メートルの範囲に広がっています。

昭和30年ごろから縄文土器が採集されていましたが、昭和42（1967）年に排水溝設置工事が行われた際に、縄文時代前期の土器とともにサヌカイト製の石鏃などの石器がみつかり、縄文時代前期の遺跡であることがわかりました。

出土した土器の中では、高さ約31センチメートルの深鉢形土器が復元されたものとして重要です。これらの土器は北白川下層式と呼ばれる土器形式をもつものです。

その後の発掘調査で、遺跡の年代が鎌倉時代まで至ることがわかってきました。遺跡のほぼ中央の石川に近い場所では、弥生時代後期の庄内式と呼ばれる土器が出土しました。また、奈良時代の掘立柱建物跡もみつかり、めずらしいことに柱の根元がそのまま残っていました。奈良時代の遺物の中には緑釉の円形硯や塼（煉瓦のようなもの）が含まれていて、付近に寺院などの大きな建物があったことをうかがわせます。遺跡北端の甲田地区と接する場所では、市内ではじめて埴輪円筒棺がみつかりました。これは、本来古墳に使われる円筒埴輪を再利用して、遺体の大きさにあわせて数本つなぎ合わせたものです。副葬されていた土器から6世紀の中ごろに埋葬されたことがわかります。また、同じ場所では鎌倉時代の溝や建物跡もみつかりました。

このように、石川に接した錦織遺跡では、縄文時代から人々が生活していたことがわかり、市内でも最も古い遺跡の1つといえます。

参考文献　「富田林市史」第1巻

錦織遺跡出土の深鉢形縄文土器（府立富田林高校）

錦織遺跡出土の埴輪円筒棺（南から）

2 喜志遺跡

近鉄長野線喜志駅下車東北へ徒歩12分

近鉄喜志駅から東へ歩いて5分ばかりの喜志小学校の北側、富田林市木戸山町から北は羽曳野市東阪田一帯の広い範囲にわたり、昔から多くの遺物が見つかっています。この一帯が、弥生時代中期の集落遺跡として名高い喜志遺跡です。このあたりは石川からながめると、15メートルほど高くなった標高約50メートルの河岸段丘上に位置していて、現在は大部分が宅地になり、ほんの一部が田畑として残されているだけです。

この喜志遺跡は、最初鳥居龍蔵という人たちによって調査され、新聞に発表されました。大正6（1917）年のことです。その後も幾度か調査されてきましたが、近年の宅地開発や小学校校舎増改築等にともない調査の機会も年々増えてきています。

これらの調査から、平面を円形あるいは方形に浅く地面を掘りくぼめた竪穴住居の跡が、かなりの数にのぼって発見され、弥生時代に集落のあったことが明らかになりました。

また住居跡の周に断面がV字状の浅い溝や集落の周りに環濠がめぐらされていたことも確かめられ、さらに井戸の跡や土器を焼くための遺構と思われるものも見つかっています。

出土した遺物をまとめてみると、櫛の歯のような道具を用いて櫛目状の文様をほどこした壺形土器や、高杯・甕・鉢など多くの土器類、さらに石庖丁・石剣・石槍・石斧・石小刀・石鏃・石皿・たたき石・砥石・管玉などの多様な石器類におよんでいます。

特にサヌカイト製打製石器とその未製品、原石や破片などが多く出土し、喜志遺跡の大きな特色となっています。

この遺物の豊富さは、東方約3キロメートルにある二上山麓の産地で採集された、サヌカイト原石を加工していた遺跡ではないかとの推測をうらづけるものといえます。

弥生土器焼成(しょうせいこう)壙想像図（読売新聞社）

喜志遺跡発見の土器焼成壙（大阪府教育委員会）

3 中　野　遺　跡

近鉄長野線富田林駅下車北へ徒歩15分

近鉄富田林駅と喜志駅のなかほどにあって、西は国道170号線から東は石川をのぞむ河岸段丘のはしまで、この遺跡はひろがっています。

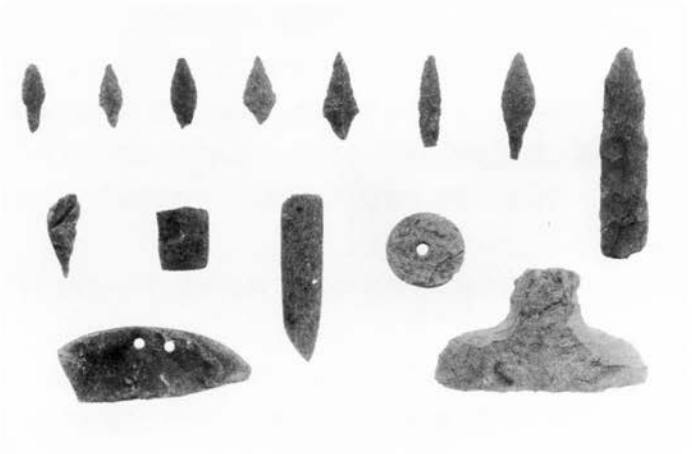
この遺跡については、古く明治25（1892）年の『人類学雑誌』の中に「河内における石器の新発見」として紹介されています。それから後、この遺跡の調査は行なわれず、昭和45（1970）年になって中野町の一角に温室ハウスが建設されることになり、調査する機会が再びできました。この時の調査は小さい範囲にとどまりましたが、壺・甕・鉢・高杯など、弥生土器の破片が出土し、弥生時代中期に属する遺跡であることがわかりました。

出土した土器片にみえる文様には、櫛描文や流水文・刺突文・円形浮文などがあり、これらの中に「河内の土器」といわれている生駒西麓産の粘土で焼かれたものが多くありました。石器も石庖丁・石槍・皮はぎ・たたき石と多種にわたっています。

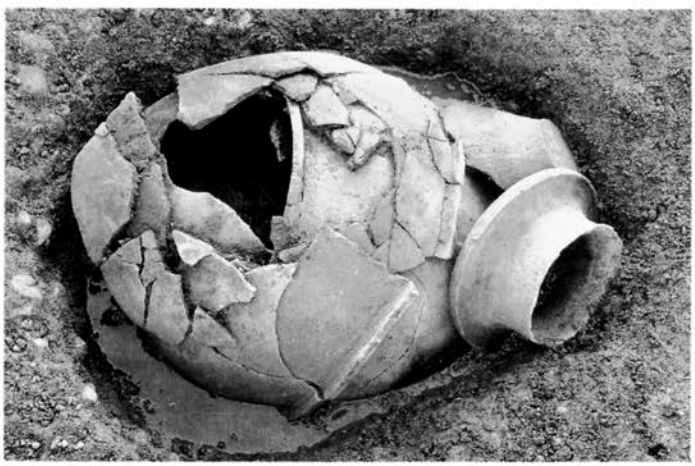
弥生土器が出土した層の上には、さらに古墳時代以降の遺物を含む層が堆積していて、ここから多くの須恵器や土師器の破片も採集されています。

また、別の地点での調査では、石を敷きつめた遺構や井戸・掘立柱建物跡・溝とともにたくさんの土器や瓦などが出土しました。瓦には白鳳時代から奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代に至るまでのものが含まれていました。さらに塔の中心にたてる柱の基礎になる心礎がみつかり、古代から中世にかけて寺院があったことがわかりました。

これらのことから、この一帯は弥生時代から人々が生活していたことがわかるとともに仏教文化の先進地域だったといえます。



中野遺跡出土の石器・石製品（弥生時代）



中野遺跡出土の甕棺（弥生時代）

4 甲田南遺跡

近鉄長野線川西駅下車南へ徒歩３分

近鉄長野線川西駅の北側を東西に延びる市道を北の境にして、西は線路付近から東は石川までの甲田地区に広がっています。

この遺跡が発見されたのは昭和50（1975）年のことです。国道309号線内に下水道管を埋設する工事中に多量の土器と遺構がみつかりました。これがきっかけとなって国道309号線内の本格的な発掘調査が行われ、甲田南遺跡が弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡であることがわかりました。

その後の周辺の発掘調査で、それぞれの時代の様子が明らかになりました。

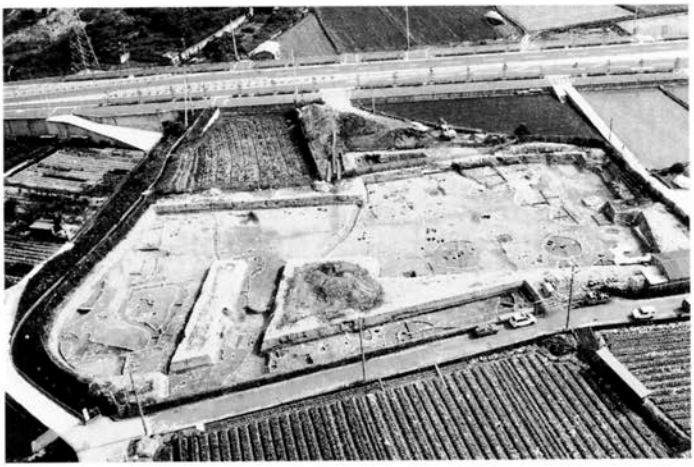
弥生時代の中ごろから終わりごろにはほぼ旧国道170号線から石川までの間に集落があって、集落の東端には環濠をめぐらし、直径５～10メートルの円形の竪穴住居に住んでいました。

出土した遺物のなかには、弥生土器や石器にまじってめずらしいことにタコ壺がありました。きっと海岸のムラからタコ壺の中にイイダコを入れて持ち帰ったのでしょう。

旧国道170号線付近では、古墳時代後期と奈良時代の建物跡がみつかっています。古墳時代のものは方形の竪穴住居で、奈良時代のものは地面に穴を掘って直接柱を埋めて建てた掘立柱建物です。

平安時代には弥生時代の集落があった範囲に建物跡がみつかっていて、集落の一角には火葬墓が３基確認されています。その中の一つは、土師器の甕の中に和同開珎を数枚のせた皿が納めてありました。火葬が行われるようになったのは奈良時代のことです。当時、火葬されたのは僧侶や社会的身分の高い人たちだったと思われます。

鎌倉時代になると、集落も遺跡の西の方にあったようです。



甲田南遺跡の竪穴住居跡（弥生時代）

甲田南遺跡出土の蔵骨器（平安時代）
※皿の上に和同開珎がのせられていた

5 廿　山　古　墳

近鉄長野線滝谷不動駅下車北西へ徒歩10分

近鉄長野線滝谷不動駅から府道を西に進み、外環状線を越えて廿山の集落に向うと、左手に周囲よりひときわ高くこんもりとした丘があります。この丘の上に廿山古墳が位置しています。

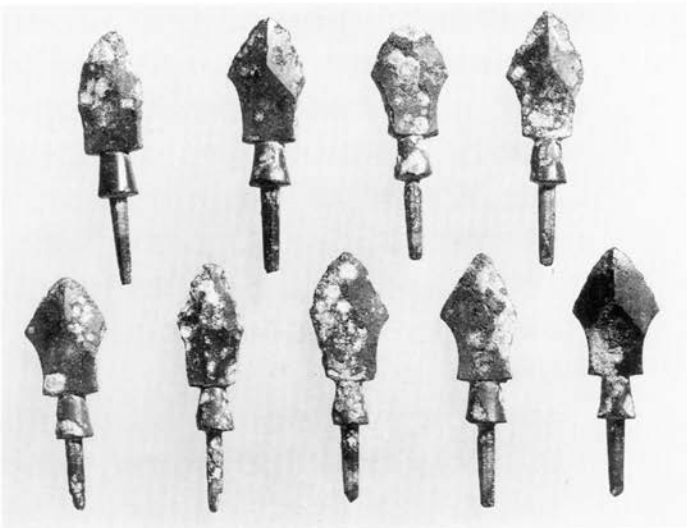
この古墳は前方後円墳で、前方部を東の平地に向けています。古墳の大きさは全長48メートル、後円部の直径35メートル、高さ5.5メートル、前方部の幅は20メートルあります。後円部には盗掘をうけた跡があって、内部施設については、はっきりわかっていませんが、石を敷いた排水溝の一部と思われるものが残っていました。おそらく粘土槨の上に木棺を安置した状態であったと推測されます。

古墳から遺物が出土したのは明治16（1883）年のことです。この遺物は当時の東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に収められ、「明治17年埋蔵物録」には鏡・銅鏃・刀剣・鉄鏃と記されていました。現在は銅鏃９本だけが東京国立博物館に収蔵され展示されています。この銅鏃は、銅鏃の中でも最も形状の複雑なものと言われています。

古墳の年代については今後の調査に委ねなければなりませんが、銅鏃をともなう点から古墳時代前期の４世紀後半の時期に当てはまると考えられます。

廿山古墳のすぐ北側には二本松古墳と呼ばれる小さな円墳があって、これらの古墳を保存するためにトンネル工法を用いて市道川西半田線が開設されました。古墳を現状のまま残して道路を貫通させた例は数例しかなく、市道級では全国で初めてのものです。

廿山古墳は石川中・上流域に残る数少ない古墳時代前期の前方後円墳として、また、市内南部の地域を治めた首長のシンボルとしてその存在は貴重です。



廿山古墳出土の銅鏃（東京国立博物館）

廿山古墳遠景（北東から） ※白線内が古墳

6 彼方丸山古墳

近鉄長野線川西駅下車東へ徒歩25分

楠風台住宅の北西の一角を占める古墳が彼方丸山古墳です。

この古墳は直径約35メートル、高さ約4.5メートルの円墳で、昭和43（1968）年の夏、大阪府教育委員会が実施した調査によって、周囲に幅約9メートルの浅い濠をめぐらせていることがわかりました。また、周濠の中には葺石と思われる丸石が堆積していて、もともと葺石が使われていたと考えられています。埴輪については、墳丘上では全く認められませんでしたが、周濠の中から朝顔形埴輪などの埴輪片が出土していることから、墳丘に設けられていたと考えられています。

内部構造については、調査されていないため明らかではありませんが、竪穴式石室をもっているのではないかと考えられています。

この古墳は、石川の東の地形的にかなり高い河岸段丘の上にあって、石川を広く望み、下流の古市古墳群の一角にいたるまで展望できる絶好の位置を占めていることから、古墳の周辺にあたる市内東部の彼方・佐備・板持の地域を支配していた地方豪族の墳墓ではないかと考えられています。

古墳の造られた年代は、埴輪から5世紀の初めごろと考えられ、古市古墳群が造られた時期と一致する点でも興味が深く、富田林市におる数少ない古墳時代中期の古墳としてたいへん重要なものです。

また、この古墳の上方の丘陵にかけては、弥生時代後期の竪穴住居の跡がたくさんみつかっていて、当時の集落が高地に営まれる特徴をよく示しています。

参考文献　「富田林市史」第1巻
「富田林市の埋蔵文化財」

彼方丸山古墳全景（南西から）

出土した朝顔型埴輪の上部（大阪府教育委員会）

7 田中古墳群

近鉄長野線滝谷不動駅下車北東へ徒歩20分

富田林市伏見堂の嶽山に近い丘陵上に5基の古墳があり、これらをあわせて田中古墳群とよんでいます。この地は、すぐ目の前を石川がゆるやかに流れる、たいへん見晴しのよい所です。

5基の古墳は群集墳をなし、そのうち3基は宅地開発にともない発掘調査が実施されました。調査された古墳は、どれも直径約20～30メートルの円墳で、内部は両袖式と片袖式の型式をもち、野石を積み上げた横穴式石室であることが確認されました。

1号墳は、現在墳丘や石室の一部がこわれたまま放置されていて、床面には小石をしきつめたあとがあります。副葬品としては、鉄地に金銅を張った馬具・鉄刀片・鉄鏃、さらに高杯・鼓・壺・装飾付壺破片などの須恵器が出土しています。

2号墳は、玄室内に凝灰岩製家形石棺の蓋石が残されていて、この棺蓋は現在富田林市立第二中学校校庭に保管されています。

3号墳石室内部の側壁は、比較的垂直に整えられていて、床面には小石がならべられ、石室中央から羨道に向かって排水溝が作られていました。また、玄室と羨道の間には凝灰岩の板が立てられてあり、2号墳と同じように凝灰岩製石棺の破片が残されていました。

4号墳はこの古墳群の中では最も大きく、比較的保存のよい片袖式の石室をもっています。

5号墳の墳丘には花崗岩の石材が露出していますが、内部の様子は未調査のため詳しくはわかりません。しかし他の4基と同じように横穴式石室をもっているのではないかと考えられています。

この古墳群は六世紀中ごろから終わりごろに造られたもので、この周辺に勢力をもっていた豪族の人たちの墓であろうと考えられています。

4号墳の石室内（南から）

2号墳の凝灰岩製家形石棺蓋（市立第2中学校校庭）

8 新堂廃寺

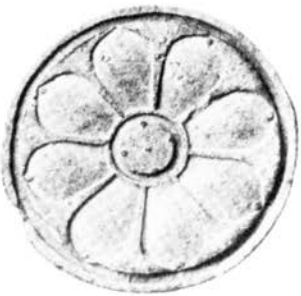
近鉄長野線富田林駅下車北西へ徒歩20分

現在、緑ケ丘町の府営住宅中央に広場が残されています。これが大阪府下で四天王寺と肩をならべる飛鳥時代の寺院址、新堂廃寺があったところです。

この地は小字を堂の前といい周辺から多くの古瓦がみつかり、一部学者の間で新堂廃寺と仮称されていました。昭和34（1959）年と昭和35（1960）年に行なわれた発掘調査の結果、多くの飛鳥時代とそれ以降の瓦とともに基壇遺構の一部がみつかりました。基壇というのは、建物を建てる時の基礎施設のことで、石積・瓦積・塼（煉瓦のようなもの）積の3種がありますが、ここでは瓦積の基壇が残されていました。

ただその基壇の年代は奈良時代のもので、飛鳥時代に創建された古い基壇は削りとられて整地され、奈良時代に改めて再建されたことが確かめられました。これによるとこの寺の伽藍配置（堂や塔のならび方）は、南北に3つの建物が並んでおり、最も南側のものを塔址と考えると中央は金堂址となり、北側は講堂址という南向きの四天王寺式となります。塔址の基壇は一辺13.4メートル、金堂址は東西15.9メートル、南北14.1メートル、講堂址は南北14.2メートルで奥行きはよくわかっていません。さらに塔と金堂の西に、南北27.6メートル、東西16.4メートルの細長い建物基壇がありましたが、この建物が何であったかは、はっきりしていません。

出土した屋瓦の中に、飛鳥時代に属する素弁蓮華文軒丸瓦（写真1～3）があり、続いて白鳳時代山田寺式の単弁瓦（写真4）、川原寺式の複弁瓦（写真5）、さらに天平時代の複弁瓦（写真6）、鎌倉時代の巴文瓦など、それぞれの時代の代表的な型式の瓦がそろっています。このほか鬼面文隅棰先瓦、棰先瓦、鴟尾の破片も出土しています。



<写真1>素弁蓮華文軒丸瓦

<写真2>素弁蓮華文軒丸瓦

<写真3>素弁蓮華文軒丸瓦

この寺院址西側にはオガンジ池という寺名を残す池があることから、新堂廃寺は創建当時「オガンジ」と称したと考えられます。「オガンジ」に「烏含寺」の字をあてると、もと百済（くだら）の寺として「烏含寺」とよばれていた韓国忠清南道（チュンチョンナムド）保寧郡（ボリョングン）嶺山面（ミョンサンミョン）聖住里（ソンジュリ）にある聖住寺址と何か関係があるようにも思われます。富田林市の南部には、古く「百済郷（くだらごう）」の名があり、その昔、百済から多くの人びとがこの地に移り住んでいたことが『日本書紀』にも記されていて、その人びとによって伝えられた百済文化の影響を示す例として、この寺院址は大変興味あるものといえます。

新堂廃寺主要建物配列図（大阪府教育委員会）

<写真４>単弁重圏文軒丸瓦
（山田寺式単弁瓦）

<写真５>川原寺式の複弁瓦

<写真６>天平時代の複弁瓦

9 お亀石古墳

新堂廃寺から西へ徒歩5分

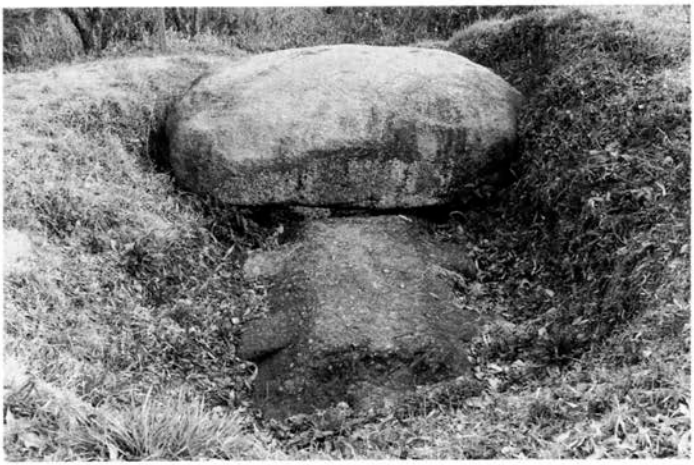
オガンジ池北側の丘陵上に、金剛・葛城・二上の山々と、石川谷をのぞんでお亀石古墳があります。地表に露出している石棺の上部が、ちょうど亀のように見えるので、お亀石古墳と昔からよばれてきました。

この古墳は、南に向かって傾斜した丘陵の尾根筋につくられた直径約30メートル、高さ約3メートルの円墳で、羽曳野丘陵の昔のおもかげをわずかに残す雑木林の中にあります。

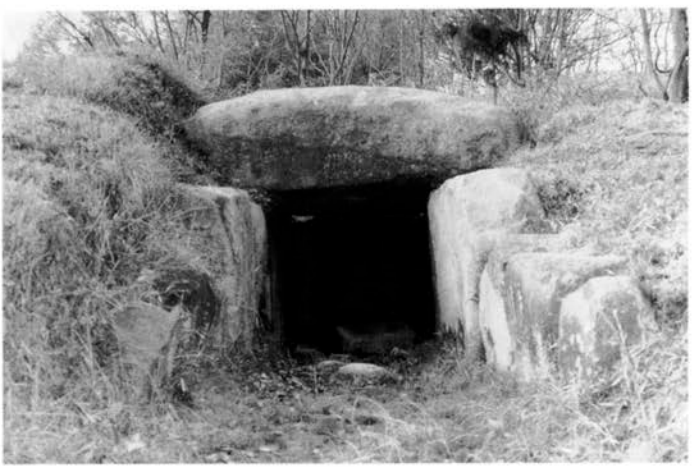
古墳の内部は、横口式石棺ともよばれる石棺と羨道との組み合わせからなっていますが、古墳時代後期の古墳にみられる横穴式石室のように石棺を納める玄室を設けていないのが、この古墳の大きな特色のひとつです。また二上山産の白石とよぶ凝灰岩でつくられた家形石棺の蓋には6個の縄掛突起がついていて、正面には遺体を納めるための入口が設けられています。そしてその入口を塞ぐための石の栓が残されていて、これも大変貴重なものといわれています。

この古墳の年代は、玄室が設けられていないこと、羨道が切石造りであること、石棺の型式が新しいことなどから7世紀前半であろうと考えられています。

またこの古墳の石棺のまわりには、飛鳥時代に寺院の屋瓦に用いた平瓦を護壁のように積みめぐらしてあり、大変重要視されています。というのは、この平瓦と同種のものが、すぐ近くにある新堂廃寺にも使われていたからです。当時、寺を建てることは、百済から伝えられた最新の建築技術であり、新しい宗教としての仏教を信じることでした。このことからお亀石古墳は当時の百済文化を積極的に受け入れて新堂廃寺を建てたこの地方の豪族の墳墓であろうと考えられます。



石棺の上蓋と羨道の天井石（北から）



羨道入口から横口式石棺をみる（南から）

10 オガンジ池瓦窯跡

新堂廃寺から西へ徒歩３分

府営緑ケ丘住宅の北西に接してオガンジ池があります。この池の東北隅の一角に瓦窯が営まれていました。この窯は谷をせきとめて造られたオガンジ池の水面下に沈んでいますが、窯が造られた当時は丘陵の南斜面にあって、窯の南側には小川が流れていたと思われます。

この窯の存在が明らかになったのは昭和44（1969）年のことです。池の水によって洗われた窯の壁面が一部露出していました。そして窯の内容を明らかにするために発掘調査が行われ、この窯が無段の半地下式登窯であることがわかりました。全長約５ｍ、幅約２ｍの大きさがあって、床面には天平時代（８世紀前半から中ごろ）の瓦片が大量に堆積していました。また、壁面を補修するために白鳳時代（７世紀後半）の瓦が使われていて、この窯が白鳳時代から瓦を焼いていたことがわかりました。つまり、白鳳時代から天平時代までの約100年間にわたって窯が使われていたわけです。

この窯の特色は、天平時代の瓦を焼いたときに燃焼部の床をロストル（火格子）状に改造し、奥壁には縦方向に２本の煙出し溝を掘って平瓦でふたをしていることです。いずれも火の通りや煙の通りをよくするために工夫されたものです。

その後、昭和60（1985）年に池堤の改修工事が行われることになった機会に、水面下になっていた部分を発掘調査することができました。その結果、前述の窯の南側にさらに窯があったことがわかりました。この窯は有段の半地下式登窯で、北側の窯と同一線上に造られていて、床面には白鳳時代の山田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦をはじめ天平時代の瓦が大量に堆積していました。また、これらの瓦にまじって塼や硯が含まれていました。さらに瓦を焼いたときに生じる灰をすてた灰原からは飛鳥時代（７世紀前半）の素

オガンジ池瓦窯跡全景（南から）

瓦・塼出土状況（南から）

弁蓮華文軒丸瓦や棰先瓦、白鳳時代の川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦、そしてめずらしいことに陶棺片が出土しました。

これらの調査から、このオガンジ池瓦窯は飛鳥時代から天平時代の約200年間にわたって同じ場所で、なおかつ同一線上に斜面の下方から順に上方に窯を築いて瓦などを生産していたことが明らかになりました。そして、この窯で焼かれた瓦と同一の瓦が窯から約100m東南の新堂廃寺に使われている事実から、新堂廃寺専属の瓦窯であったことが確実になりました。

こうした飛鳥時代の寺院に付属して近くに造られた瓦窯は全国でもめずらしく、現在のところ、奈良県明日香村にある飛鳥寺と富田林市の新堂廃寺の2例しかみつかっていません。

オガンジ池瓦窯で焼かれた瓦の種類もそれぞれの時期の典型的な型式（山田寺式・川原寺式・平城宮式）の瓦があります。なかでも山田寺式の軒丸瓦が奈良県桜井市にある蘇我倉山田石川麻呂によって建てられた山田寺のものと非常によく似ていて、両寺の関係の深さをうかがわせます。オガンジ池瓦窯は当時の大和と河内の密接な交流を物語る貴重な遺跡ということができます。

参考文献　「富田林市史」第1巻
「富田林市の埋蔵文化財」

<写真１>　素弁蓮華文棰先瓦

<写真２>　素弁蓮華文軒丸瓦

<写真３>　素弁蓮華文軒丸瓦

11 龍　泉　寺

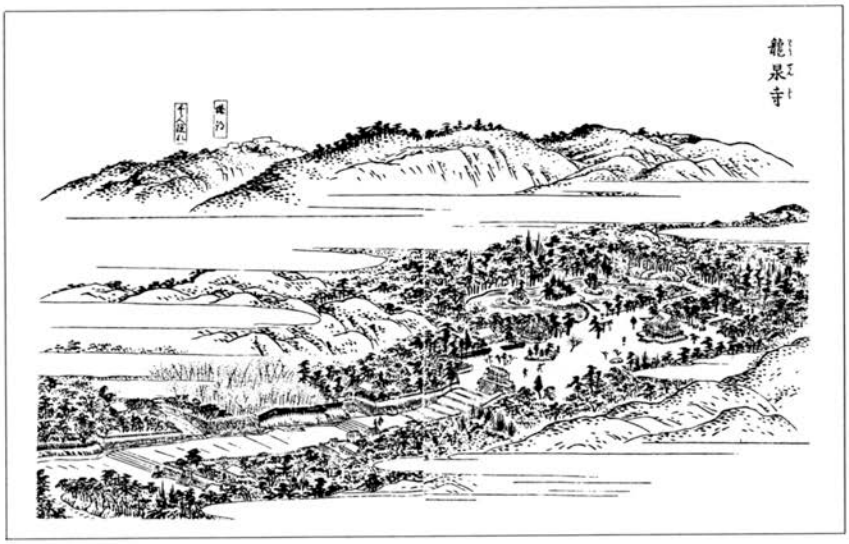
近鉄長野線富田林駅下車、金剛バス龍泉停留所徒歩30分

富田林市の南東、嶽山中腹に龍泉寺の名で知られる牛頭山医王院龍泉寺があります。薬師如来を本尊とする真言宗の古い寺院で、古代には三重塔をはじめ金堂、講堂などがたちならび、中世には23に及ぶ塔頭（子院）があって、たいへん栄えていました。現在はみるからに清楚な感じのする山寺となっています。古い記録によれば、当寺の創建は西暦594年で、河内石川地方からでたともいわれている豪族で蘇我氏の一族、馬子の手で創建されたものといわれています。また龍泉の名が示すとおり、龍にまつわる伝説も伝えられています。

さて本堂西側の境内には、国指定の名勝としてよく知られている庭園があります。池を中心にして、周囲を木立ちに囲まれたこの庭園は南北朝以前のものといわれ、東西約45メートル、南北約60メートル、水面約1,500平方メートルの広さを持っています。池の中には南北にほぼ一列に並ぶ3つの小島があり、中央に水神である弁財天、その両側に神通力を与えるといわれる荼枳尼天、魔障をとり除く聖天の社をそれぞれまつっています。

この庭園によく似たものとして、京都府宇治市にある平等院・法金剛院、奈良県の大乗院・浄瑠璃寺などの庭園があり、これらは浄土式庭園と呼ばれています。龍泉寺庭園もこの様式の一種であるといわれていますが、造られた時期は古代にさかのぼるという説もあり、この説をとると日本最古の庭園であるということになります。

また龍泉寺には、国の重要文化財に指定されている仁王門があります。南北朝の戦乱の最中、さいわい残ったこの門は、形式手法などから鎌倉時代の中ごろのものとされ、中世のものとしては大阪府でもただひとつの八脚門であるといわれています。八脚門とは控柱が主柱である本柱の前後に各四本、合計八本の柱をもつ古い時代の代表的な門の形です。これまでに数回の修理が行なわれていて、昭



河内名所図会　享和元（1801）年

龍泉寺庭園（南東から）

和39（1964）年4月から昭和40（1965）年6月までの約14ヵ月の期間をかけて行われた解体修理が最近のものとなっています。この修理では可能なかぎり建立当初の形式にもどすことがこころがけられ、修復を終えた現在の仁王門はより原形に近い形となり、簡素にして雄大な姿をとどめています。

この門の中に納められている金剛力士像（仁王像）の胎内には、建治元（1275）年の年号が記されていました。これによって仁王像の造られた年代がわかるとともに、さきの仁王門の建立年代を知る重要な手がかりのひとつにもなっています。

仁王像は写実的な表現がされている反面、頭部と体の構成や細かな筋肉表現などにわずかに形式化されている点もみられ、鎌倉時代中期の一般的な手法をよく示しており、大阪府の有形文化財として指定を受けています。

大阪府指定文化財としては、この他に木造の聖徳太子二歳像も安置されています。寄木造りに彩色された高さ40センチメートル程の小さな像ですが、胎内には数枚の納入品があり、それぞれに記された年号から推定して、製作年代は興国7（1346）年であろうとされています。なかでも私本版画の如意輪観音像は、正応4（1291）年の年号をもつ優秀な作で、日本仏教版画の歴史を考えるうえで標準となる貴重なものです。

なお当像は聖徳太子が二歳のときに、東方に向かい「南無仏」と唱したとされることに由来する像で、「南無仏太子」とも呼ばれています。

龍泉寺仁王門（南から）

木造聖徳太子二歳像

12 美具久留御魂神社

近鉄長野線喜志駅下車南西へ徒歩15分

近鉄喜志駅から南西方向、およそ0.7キロメートル、羽曳野丘陵の東麓に「美具久留御魂神社」があります。なだらかな丘陵の開発が進むなか境内一帯はひときわ緑濃く、うっそうとしています。旧国道170号線からは大きな鳥居をくぐり、粟ケ池を左に見ておよそ0.5キロメートル、整備された参道を西に向かって歩いて行くと当神社があります。

祭神としては、本殿中央に美具久留御魂神（大国主命）、左に天水分神・弥都波迺売命、右に国水分神・須勢理比売命を祀っています。

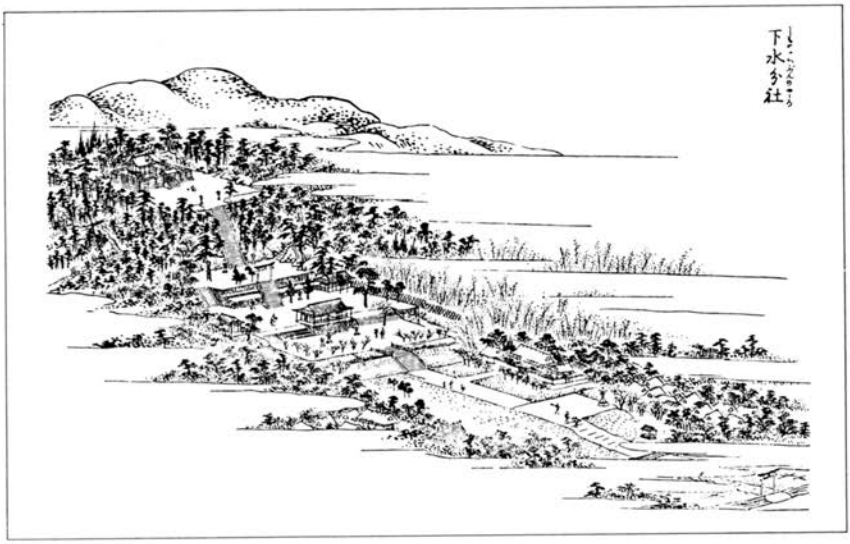
また境内神社には、10社合わせて39柱の神、相殿には13柱の神が祀られています。

社伝によれば、崇神天皇10年に大蛇が出没し百姓が大いに恐れたため、天皇が幣を捧げて大国主命の荒御魂を祀り社殿を創建したといわれています。

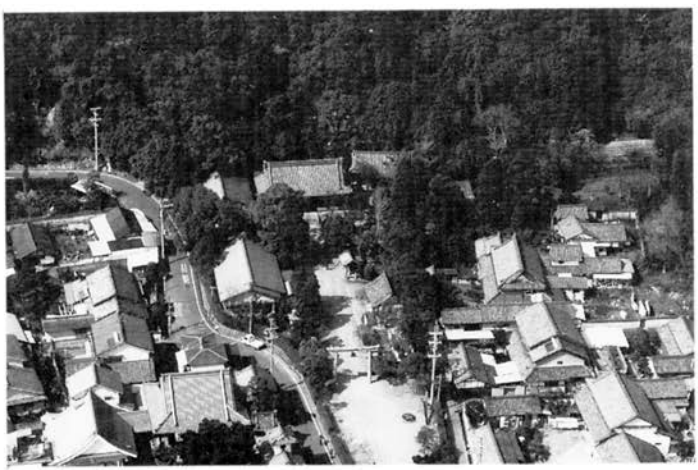
社名、美具久留御魂神社の名は、他に古くから和爾宮・支子宮、千早赤阪村の建水分神社を上水分社と呼んだのに対して下水分社と呼ばれてきました。和爾宮の社名は、文徳天皇実録の嘉祥3（850）年12月の条に「河内和爾神の階を進め、従五位上を加う」とあり、この神社の古さを示しています。

当神社は朝廷との関係が古くからあり、神位や田地がしばしば寄進されました。現在では周辺の人々から土地の氏神・水の守り神として崇められています。

祭祀の主な行事は、当神社背後の山頂で、4月15日前後に天神をおがむ他に、3月1日・7月15日・10月17日に行われます。なかでも10月17日の秋祭には、みこしのお渡りや地車（だんじり）ひきがあって格別のにぎわいをみせます。



河内名所図会　享和元（1801）年



美具久留御魂神社正面（東から）

参道左手にある粟ケ池は、古くから当神社に参拝する人たちが手を洗い、口をすすぎ、身を清めるための池であったといわれています。後にはかんがい用の池としても利用され、今に続いています。

『日本書記』仁徳天皇13年の条に

「13年冬10月……和珥(わに)池を造る」

とあり、推古天皇21年の条にも、

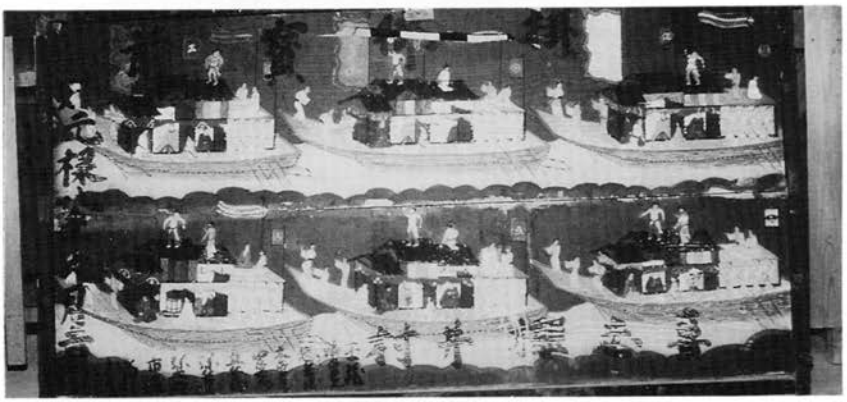
「21年冬11月、掖上池・畝傍池・和珥池を作る」

としるされています。大阪府誌では、この和珥池と粟ケ池について「仁徳天皇の13年冬10月に開さくされたが、今、どこにあるか明らかではない。美具久留御魂神をひとつに和爾神ということから考えれば、あるいは喜志村にある粟ケ池ではないだろうか。またあるいは、和爾池は粟ケ池とわずかに堤防をもって境界とされていたが、いつの日か堤は崩壊してひとつの池となり、和爾の名は忘れられ、世の人は単に、粟ケ池と呼ぶようになったのだろう」とその由来を説明しています。

当神社の拝殿には、たくさんの絵馬がかけられてあります。そのなかに、全国的にも珍しい江戸時代に友好親善使節として李氏朝鮮から日本へ派遣された朝鮮通信史(ちょうせんつうしんし)の船旅の様子を描いた絵馬があります。この絵馬は縦98センチ、横189センチあり、元禄(げんろく)8（1695）年に喜志桜井村（現在の桜井町付近）の11名から奉納されたもので、当時、朝鮮通信史の評判が広く庶民の間にいきわたったことを示す貴重な資料といえます。

参考文献　「富田林市誌」
「富田林市史」第４巻
「角川日本地名大辞典」27大阪府

南東から粟ケ池と神社を望む（矢印が御神体となっている山）



朝鮮通信使の絵馬

13 滝谷の不動尊と二童子立像

近鉄長野線滝谷不動駅下車東へ徒歩20分

近鉄滝谷不動駅から石川をこえ、坂をのぼること約20分、通称「滝谷不動」につきます。最近では、滝谷不動という名前の方が有名になって、正式な名前を知っている人が少なくなりましたが、正しくは滝谷山明王寺（真言宗）といいます。

このお寺は弘法大師が開いたものと言われています。もともとはもうすこし南の嶽山山腹にあったそうです。室町時代から戦国時代にかけて兵火にかかり勢いを失いましたが、その後江戸時代のはじめに、現在の地に再興されました。今日では広く人々の信仰を集め、毎月28日のお不動さんの日には、駅からお寺までの道の両側にたくさんの屋台が並ぶほどおおぜいの参拝者があります。

本尊の不動像は文化財としても高い価値を持っていて、両脇の二童子立像とともに国の重要文化財に指定されています。写真でもわかるように、この不動像は右手に剣を、左手に縄をもち、腰をやや右にひねって岩の上に立っています。このようなスタイルの不動像を特に「波切不動尊」といいます。

昔、弘法大師が唐（今の中国）から帰国の途中、遭難しそうになったとき、不動尊が海上にあらわれて波風を切って治めたといい、そのときの形相を思いおこして造ったのが波切不動尊の始まりであるといわれています。その後、波切スタイルの不動像はたくさん造られましたが、明王寺の不動尊はこの種の中では芸術的に特にすぐれた作品なのです。

また、この像はからだの中にすみでかかれた文字があって、制作年代がはっきりわかることも価値を高くしている理由の一つです。

その銘によると、この不動尊は寛治8（1094）年、23人の男女が協力しあって造ったものであることがわかります。23人の人々は、病気にかからず、長生きできる様にと願ってこの像のために資金を

不動尊と二童子立像

出しあったのです。

不動像の右に従っている矜羯羅童子、左に従っている制吒迦童子の両像もすぐれた作品です。矜羯羅とか制吒迦というのはともに、めしつかいとか悪鬼とかいう意味で、これらは不動明王のめしつかいになることによって救いを得ているのです。

また、当寺には高さ17.1cmほどの金銅製の宝珠鈴が伝わっています。大阪府の文化財指定を受けているこの宝珠鈴は、平安時代後期の特色を備えたもので、保存状態も極めて良く、同時代に制作されたものの中では最秀作であるといわれています。

正面（南から）

金銅宝珠鈴

14 浄谷寺の石造地蔵菩薩と板碑

近鉄長野線富田林西口駅下車東へ徒歩5分

浄谷寺は富田林町にある融通念仏宗のお寺です。もと毛人谷村にあったお寺を、天正2（1574）年に、現在地に移転したものだといわれています。

このお寺の門をくぐると、右側に二尊堂という建物があり、その中に、大阪府から文化財指定されている石造地蔵菩薩立像があります。

石造地蔵菩薩というとむずかしくきこえますが、やさしく言うと石（花崗岩）のお地蔵さんです。

このお地蔵さんが、どうして重要な文化財であるかといいますと、応長元（1311）年という非常に古い時代につくられたことがお地蔵さんの両側にきざまれた文字によってはっきりしているからです。

応長元年といいますと、鎌倉時代のおわりごろにあたります。地蔵菩薩に対する信仰は、平安時代の中ごろから次第に人々の間に広がります。鎌倉時代にはいると、お地蔵さんがあちこちにつくられるほどになりました。しかし、現在のこっているこの時代のお地蔵さんで、はっきり年号がわかるものは少なく、浄谷寺のお地蔵さんのように古い年号をもつものは、府下でもめずらしいものです。また、このお地蔵さんの足もとにきざみ出された一対の花びんは、たいへんめずらしいもので、その価値をいっそう高めています。

ところで、地蔵像の両側にきざまれた文字をさらにくわしく読むと、次のようになっています。

没故小比丘尼報恩覚霊位
応長元年歳辛亥
六月廿七日建立

石造地蔵菩薩立像

没故済戒真證覚霊位

このお地蔵さんは、報恩という人と真證という人の2人の人物の死後の供養のためにつくられたことがわかります。小比丘尼ということばから、報恩という人物は、まだ年少の女の子であったものと考えられます。地蔵は、地獄のさいの河原におちた子供を救うと信じられ、子供にはとくに関係が深いとされています。

浄谷寺にはさらにもう一つ、たいへん古いものがあります。庭の片すみにある板碑(いたび)です。この板碑は花崗岩でできていますが、表面がすりへってしまっているため、一見しただけではただの石の棒のようにしか見えません。ところが去る昭和51（1976）年、大阪石造遺品研究会の赤沢信一氏が苦心して拓本をとった結果、地蔵よりもさらに古い永仁(えいにん)元（1293）年の年号が発見されたのです。現在、富田林市にのこっている石造遺品の中では、最も古い年号と考えられます。

参考文献　「大阪の石仏」　清水俊明著
「大阪金石志」　天岸正男　奥村隆彦著
「大阪府全誌」　井上正雄著
「富田林歴史散歩」　祢酒太郎著

境内の永仁銘板碑

15 中佐備共同墓地の宝篋印塔と板持共同墓地の十三重層塔

近鉄長野線富田林駅下車、金剛バス板持・中佐備停留所ともに徒歩10分～15分

中佐備の墓地は東に金剛山をのぞむ山の斜面にあります。この墓地のまん中に写真のような石の塔がたっています。このような形をした石塔を宝篋印塔といいます。宝篋印塔は鎌倉時代以降、供養塔としてたてられることが多かったようです。

今日わかっている宝篋印塔の中では、宝治2（1248）年につくられたものが一番古いとされていますが、中佐備の宝篋印塔もその様式から判断して中世のものであろうと考えられます。その当時はまだ、ふつうの庶民は、死んでもただ土の中にうめられただけでしたから、このような立派な塔を造ってもらって供養された人物は、おそらくこの地方のかなりの有力者であったものと考えられます。しかし、残念なことにどこにも銘がないため、くわしいことは何ひとつわかりません。

これに対して板持共同墓地の十三重層塔は、土台になる石の一面に銘がはいっていて、制作年代をはっきり知ることができます。

花崗岩製のこの層塔は高さが4メートル以上もあり、重みで土台の石が地中に半分以上めりこんでいます。そのために、銘文は半分以上読めなくなっていますが、残っているわずかな部分から、「文保3年巳末」（1319年）という文字が読みとれます。他の例から推測して、この層塔によって供養された人物や施主、この層塔をつくった石工の名前がかくされている可能性があります。

1319年といえば有名な楠正成が活躍する直前ですから、楠氏に関係する名前が出てくるかもしれません。また石工の名前で言えば、東大寺の再建事業の為に来日した宋人伊行末の一派が出てくるかもしれません。もしそのようなことがあれば、この十三重層塔の価値はさらに高まるものと思われます。

参考文献　「大阪の石仏」　清水俊明著
「大阪金石志」　天岸正男　奥野隆彦著

中佐備の宝篋印塔

板持の十三重層塔

16 嶽 山 城 址

龍泉寺から西へ徒歩20分

嶽山は富田林市の南東に横たわる高さ278メートルのなだらかな山です。この山の頂上に大きな石の碑がたっています。その碑のあたり一帯が嶽山城のあとです。

嶽山城は、山腹に龍泉寺があることから、別名、龍泉寺城とも言い、楠正成の築いたいくつかの城の一つであるといわれています。もっとも、城といっても中世の城ですから、今日見ることのできる大阪城や姫路城の様な立派な天守閣をもった城ではなく、いってみれば、さくをめぐらしたとりでの様なものです。

楠正成の死後も南朝と北朝の争いはなかなか終らず、南朝方は吉野を中心にこの南河内南部を拠点にして、北朝方に対して抵抗を続けていました。嶽山の城には楠正成の子、正儀がたてこもっておりましたが、正平15（1360）年北朝の細川清氏や赤松範実という武士たちがこの城を攻め落とそうとしました。その事は、『太平記』という本の中にくわしく述べられています。（巻34、龍泉寺軍の事）それによると、嶽山の城には和田氏、楠氏などが初めは大和や河内の兵、千人あまりとともに立てこもっていましたが、寄せ手が無理に攻めようとしないので、ただ立てこもっていてもしかたがない、山の下におりて攻撃しようと考えました。そこで百人ばかりを嶽山の城に残し、木のこずえなどに旗などをくくりつけて、なお大勢の兵がたてこもっている様に見せかけました。

寄せ手の北朝方は今の廿山のあたりに陣をとっていましたが、これを見て、こんな大勢の兵が立てこもっていては攻め落とすのはとてもむずかしいと判断して、150日以上もむだに日を過しました。

ところがある時、土岐という一族の智恵ある老武者が嶽山の上を見て、山の上を飛ぶ鳶や烏が少しもおどろいたり、さわいだりする様子がないことに気づきました。これは大勢がたてこもっている様

龍泉寺城址石碑

にみせるための計略にちがいないと考えて、土岐の一族500騎は夜明けに嶽山の城をおそいました。これを見た他の武士達もいっせいに嶽山に押しよせたので、嶽山城はあえなく落城してしまったということです。

もちろん『太平記』は軍記文学の傑作であっても、記述のすべてが史実に基づいているわけではありません。近年出版された「大阪府史」などもこのような戦いにはふれておらず、『太平記』の記述は楠氏の知略を象徴する「逸話」と考えるのが適当かと判断されます。いずれにせよ後にこうした「逸話」をうみだすほど長く続いた嶽山周辺での南北朝の争いも1392年の両朝合体をもって終止符を打ちました。

しかし、嶽山城はその数十年後、河内の支配をめぐる畠山家のうちわもめのときにふたたび戦乱の舞台となります。

畠山政長を襲撃した畠山義就が逆に敗れて嶽山にたてこもったのです。政長は、たてこもった義就を大軍をもって取り囲み、山の下から火をはなって攻めつけましたが義就は屈せず、糧道(りょうどう)をたたれて高野山めざして敗走するまで3年近くももちこたえたのでした。この籠城(ろうじょう)はほかに例をみない長期のものであり、落城したとはいえ義就は「当代随一の名大将」と評されました。

参考文献　「富田林市誌」
「太平記」日本古典文学大系
「応仁の乱」　鈴木良一著
「大阪府史」第3巻、第4巻

北東の廿山方面から嶽山城址付近を見る

17 錦織神社本殿と摂社

近鉄長野線川西駅下車西へ徒歩５分

近鉄川西駅から廿山の方に向かって歩くと、川西小学校の手前にこんもり茂った森があります。そこが錦織神社です。

入口から森の奥に長い参道がのびています。参道の両側には大木が連なり、あたりの騒音をさえぎっています。散策を楽しむ近所の老人に時たま出会うことはありますが、訪れる人も少なく、ふだんは森閑としています。

けれども、年に一度、10月10日と11日のお祭りの日には近郊近在から大勢の人々が集まりにぎわいをみせます。錦織・廿山・向田・新家・加太・宮甲田・伏山・須賀など、もとの錦郡村と川西村の各地区から繰り出しただんじりが奉納されるからです。

さて、この参道の奥にある建物が本殿です。この本殿の前に立つと、屋根の形が特徴的であることにまず気がつきます。写真右手の少し丸みを帯びた形の軒を唐破風といい、その少し上の三角形の部分を千鳥破風と呼びますが、このように唐破風のうえにさらに千鳥破風をのせた変化に富んだ屋根の形が大きな特徴となっています。このような屋根の形は同時期（室町時代）のものとして、河内長野市の長野神社などにもみられますが、その例は非常に少なく貴重な建築物として国の重要文化財の指定を受けています。

また、このような建築様式は、安土桃山時代から江戸時代にかけて多く造られた複雑な屋根様式の原型となりました。有名な日光東照宮本殿の拝殿なども、この様式を変化させたものだといわれています。

なお、本殿の東と西の脇にある二つの小さな建物を摂社といいます。その建築年代は不明ですが、神社建築の専門家で本市文化財調査会委員でもあられた富田林市川西在住の故竹原吉助氏は、「本殿と同期の作である」と評しており、小さいながらも本殿と同じく、国

錦織神社本殿（南西から）

の重要文化財の指定を受けています。

ところで、同神社近くの内田次郎氏の所蔵する資料に南北朝期から戦国期にかけての同社の造営にかかわる文書があります。

同文書によれば、

①同社は中世には「水郡宮」とよばれていたこと。

②正平(しょうへい)18（1363）年をはじめとして(注1)戦国期に至るまでの間に再三修築や屋根のふきかえがなされたこと。

③これらの工事には「神主兼惣長者(そうちょうじゃ)三善貞行(注2)」や「長者三善亀王丸」・「石川五郎殿」・「彼方亀若殿」などの土地の有力者を中心にして、近郷の民衆の協力があったこと。

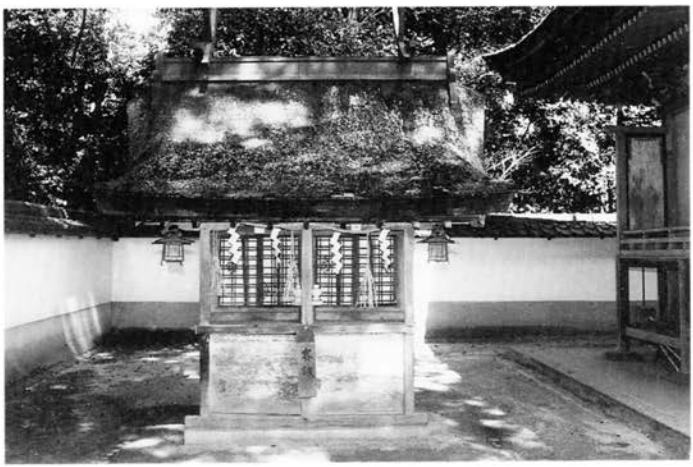
などがわかります。

〈注1〉これでもってただちに現存の建物の建立時期を南北朝期とすることにはなお慎重であらねばならない。文化庁の工藤圭章文化財鑑査官は15世紀前半まで遡らせるのも躊躇されている。

文化財建造物保存技術協会『協会通信』33号昭和62年7月号参照

〈注2〉今でいうと村長のような役目。百済郷（市内南部をさす）全体の惣長者と考えられている。

河音能平著『中世封建社会の首都と農村』P131参照



西側摂社（南から）

東側摂社（南から）

18 興正寺別院

近鉄長野線富田林西口駅下車東へ徒歩10分

興正寺の古い文書によると、興正寺別院は応永年間（1394～1428年）に毛人谷村に念仏道場としてつくられ、その後永禄2（1559）年ごろに興正寺14世証秀上人によって富田林寺内町の中心寺院として現在の場所に移されました。

興正寺の正しい名称は興隆正法寺といい、以前は山科（京都府）にありましたが、天文元（1532）年に焼けてしまいました。そのために大阪にあった天満別院を興正寺の本寺とし、現在の位置に新しくつくったこの寺を興正寺別院と呼びました。

この寺は東の城之門筋に表門を開き、鐘楼と鼓楼がその南北に、門を入ると正面に本堂があって、その北側には客殿と庫裡があります。境内の広さは南北約35メートル、東西約50メートルで約1750平方メートルあります。

現在の本堂は寛永15（1638）年に再建されたもので、阿弥陀仏を本尊とし、その右脇壇には宗祖親鸞上人の像を安置しています。本堂の内部は絢爛豪華で、桃山時代のなごりを残した江戸時代初期のものとして貴重です。

表門はもと桃山城にあったもので、のちに天満の興正寺に寄進され、さらに安政年間（1854～1860年）にここに移されたものだといわれ、その重厚さはまわりの町並みに一段と重みを与えています。書院と庫裡は文化7（1810）年に再建され、鐘楼と鼓楼も同じ年に今のところに建てかえられました。

それ以後、興正寺別院は富田林寺内町のシンボルとして今もその姿をとどめ、富田林御坊として地元の人々に親しまれています。

参考文献　「富田林市誌」

興正寺別院表門（南東から）

興正寺別院本堂（東から）

19 富田林寺内町

近鉄長野線富田林西口駅下車東へ徒歩10分

近鉄富田林西口駅から10分ほど東へ歩くと、富田林寺内町の中心、興正寺別院に着きます。

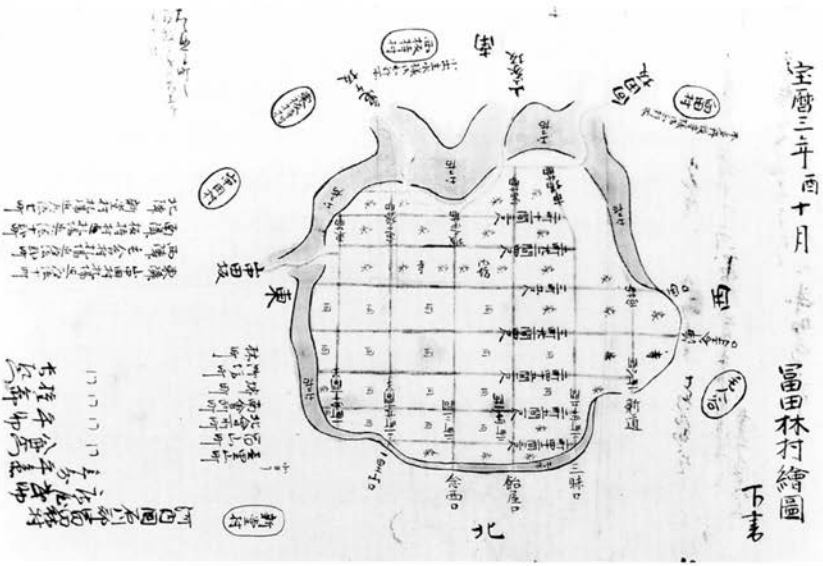
寺内町とは、中世の終わり頃（15世紀末から）に浄土真宗本願寺派寺院を中心にして建設され発展した町をさします。このような町は大阪府下には、久宝寺・八尾・貝塚・大ヶ塚など多くありますが、とりわけ富田林寺内町は建設当時の町割が今も残されており、町そのものが大変価値の高い歴史的遺産であるといわれています。

富田林寺内町の起こりは、15世紀の中頃、蓮如・蓮教両上人が旧毛人谷村に念仏道場をつくり、南河内地方の村々に仏教の教えを広めたことに始まります。蓮教上人の熱心な教えにより、富田林から古市（羽曳野市）にかけて信者の数が大変多くなりました。

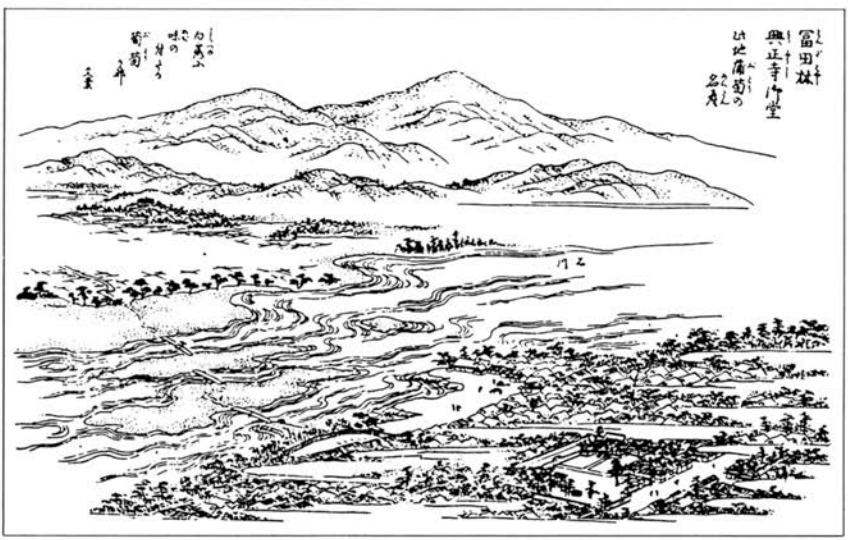
その後、永禄2（1559）年頃、蓮教上人の孫にあたる興正寺14世証秀上人がこの地に来られ、旧毛人谷村にある念仏道場より立派なお寺をつくりたいと考え、当時南河内地方を治めていた高屋城主、安見美作守直政にたのんで富田の荒芝地を銭100貫文で買いとったと伝えられています。そして信徒である旧中野村・旧毛人谷村・旧新堂村・旧山中田村の庄屋株2人ずつ計8人に興正寺別院の建立と別院を中心とした町の建設を依頼しました。

現在残っている古絵図のうち享保15（1730）年のものが古いのですが、宝暦3（1753）年のものは一番詳しく画かれています。

富田林寺内町はこの図のように、東西、南北とも約350メートルのだ円形の町のまわりに、幅の広い土居を設け、東西7本、南北5本の街路が通され、東西に長い街区にわけられていたと考えられます。また街路はほとんどが土居の中でとまり、外に通じるものは、東高野街道や平尾街道、千早街道への出入口などで、山中田坂・尚田坂西口・一里山口などに門が設けられ、時間を決めて開け閉めしてい



宝暦３（1753）年の古絵図



河内名所図会　享和元（1801）年

たようです。

元和元（1615）年以降、富田林寺内町は幕府の直轄地として代官が支配するようになりました。この時から興正寺別院を中心とした寺内町としての性格は急速に失われ、人口約2,000人の在郷町（地方の農業を基礎にして発達した商人や職人の町）として、河南地方の経済の中心地に発展しました。商業がしだいに盛んとなり、町に住む人たちは、堺、大阪などと行き来し、石川の水を利用してつくられた酒、河内特産の木綿などを多く商いました。この頃「南河内全部の富を合わせても、富田林一町にかなわない」と言われ、その豊かさをうかがわせます。現在残されている多くの家々はこの頃の商家のもので、昔の繁栄を今に伝えています。

町並み（南西から）

町並み（東から）

20 旧杉山家住宅

興正寺別院から南西へ徒歩15分

杉山家は室町時代の終わり、富田林寺内町の創建にかかわったと考えられる旧家の一つで、貞享2（1685）年に新家村彦左衛門から酒造株を譲渡されてからは、明治の半ばまで酒り造屋を営み、河内酒造業の肝煎役を務めたこともあります。

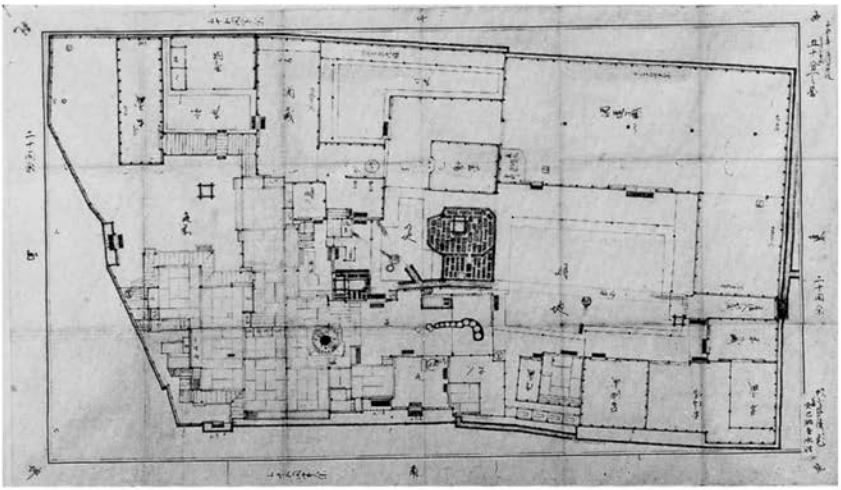
現存する住宅は、南河内地方の農家に見られる田の字型の間取り形式を取り入れた町家建築として、昭和58（1983）年12月26日国の重要文化財に指定されました。

最も古い土間部分は、1650年頃の築造と推定されます。その後1734年頃現在の姿に整いました。屋敷は東西約60メートル、南北約36メートルあり、周囲を酒蔵や土蔵が取り囲む広大なもので、明治の最盛期には、使用人だけでも70人を数えたと言われています。近年酒蔵・土蔵などが取り壊され、主屋と2棟の蔵を残すのみとなりましたが、内部の保存状態もよく近世の状態を今にとどめています。

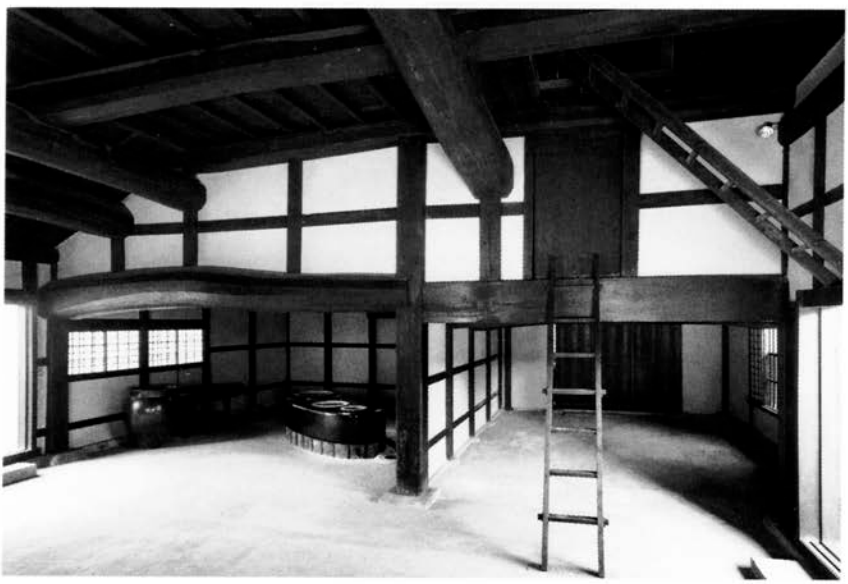
建物は城郭を思わせる豪壮なもので、座敷まわりには赤味がかった大坂壁が塗られ、大床の間の老松、襖絵などは狩野派の絵師によるものです。

数寄屋造りの奥座敷は享保19（1734）年の増築で、明治の終わり堺の与謝野晶子らとともに活躍した明星派歌人石上露子の愛した部屋として知られています。露子は本名を「杉山タカ」といい、明治15（1882）年当家で生まれました。その容姿から白菊の花にたとえられた露子は、天性の美貌とともに気品・知性を兼ね備えていたと言われています。

参考文献「重要文化財　旧杉山家住宅修理工事報告書」



嘉永３（1850）年の古図



旧杉山家住宅カマヤ（西から）

21 仲村家住宅

旧杉山家住宅から南東へ徒歩１分

旧杉山家住宅と道ひとつへだてた、南東側に高い塀のある家がありますが、これが仲村家住宅です。

同家は、酒造家で屋号を佐渡屋と称し、享保19（1734）年以後はほぼ代々徳兵衛を襲名しました。仲村家に伝わる「店卸帳」によると天明５（1785）年仲村家の酒造米高は、2135石に達し、富田林村内はもとより、河内国においても最大の酒造規模を誇り、寛政４（1792）年には、江戸に酒を出荷する酒造業の組合長である「河内一国江戸積酒造大行司」となります。仲村家が寛政年間（1789～1801年）から、河内の酒造業で重要な位置であったことがわかります。

慶応元（1865）年に画かれた正確な「屋敷図」が残されており、この図と現状を比較すると、屋敷の北側に並ぶ土蔵などは、元の酒倉の規模をほぼ踏襲しています。

現在残されている主屋は、天明２～３（1782～1783）年に建てられたもので、この南に続いている３室の別座敷や表にある店の部分も同じ時期のものと考えられています。この店の間と主屋とを別棟にして前後につくる建て方は、京都や大阪でもとくに大きな商家の構えといわれており、富田林寺内町でも特に注目されています。

また歴史上有名な頼山陽や吉田松陰もかってこの地を訪れ、当家に滞在したといわれています。

仲村家住宅外観（北西から）

仲村家住宅外観（南西から）

22 東高野街道錦織一里塚

近鉄長野線汐ノ宮駅下車北へ徒歩15分

旧国道170号線を富田林から河内長野に向かって行くと汐ノ宮駅の手前、近鉄長野線と道路が最も接するあたりの東側にこんもりと盛り上がった場所があります。そして、かつてはその西側にも同じような場所があり、それぞれ西塚、東塚と呼ばれていました。ここが東高野街道錦織一里塚です。

一里塚は、中国に起源をもつものです。街道に沿って一里ごとに塚のような土の高まりを築いて大樹を植え、旅人に日蔭を与え、一里の目印にしたといわれています。日本では江戸時代のはじめに全国的に造られました。

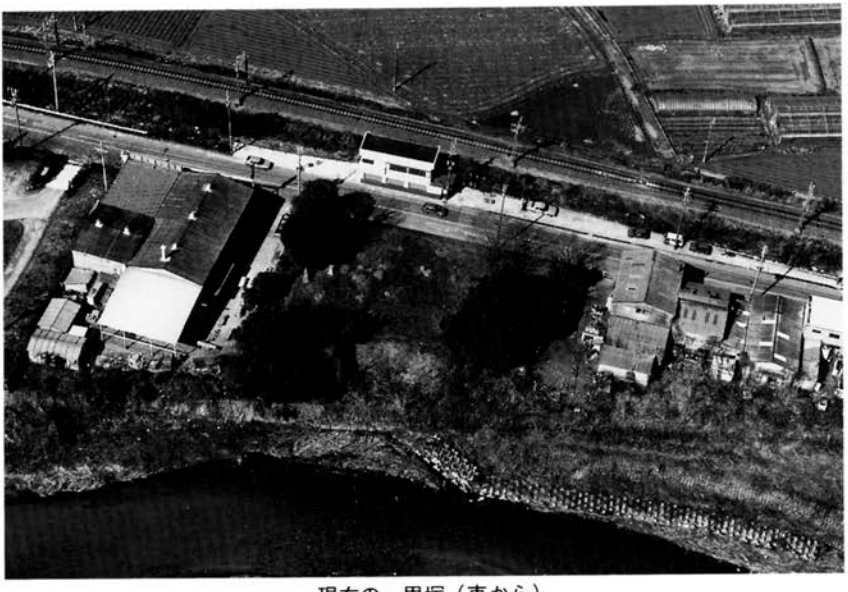
錦織一里塚は、一辺が約9メートルの正方形で、高さは約2メートルあります。かつては、この塚の上には一本松と榎(えのき)が繁っていて旅人の休み場所となり、また距離を測る目じるしともなっていました。

この付近には、昔、東高野街道が開けていました。この街道は北は京都、枚方から東の山すそを通って喜志一新堂一富田林をすぎ、錦織一河内長野から高野山まで通じており、参詣道として発展してきました。

この一里塚には、二つの宝篋印塔(ほうきょういんとう)と一つの石碑が残されています。完全な形で残されている宝篋印塔には、次のような文字が刻まれています。

東側　供養之施主河州錦部郡
　　錦郡村　田中源左衛門
西側　紀州牟婁郡芳養村日向
　　行者　法師　理元
　　宝永六年巳丑歳三月吉日
北側　具一切功徳　慈眼視衆生

昭和25年当時の一里塚（南西から）＜中野吉信氏撮影＞



現在の一里塚（東から）

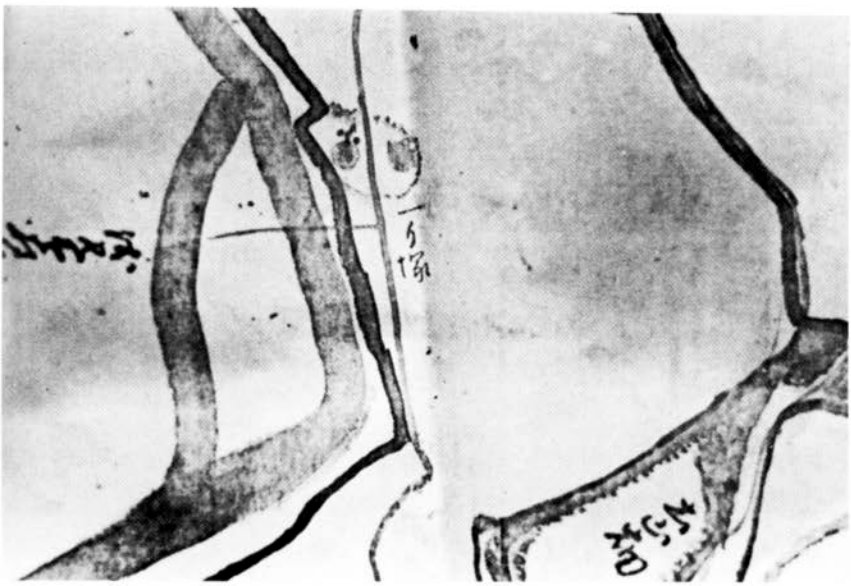
奉供養西国卅三度成就所敬白

この内容は、宝永6（1709）年3月に、紀州（和歌山県）芳養村の理元法師が西国三十三ヵ所を33度満願した供養の記念として造った宝篋印塔であって、その費用を旧錦郡村の田中源左衛門が先祖の供養のために出したというものです。

もう一つの宝篋印塔には承応2（1653）年の年号が刻まれています。

これは正円というお坊さんが同じように西国三十三ヵ所まいりを終えた記念につくったものです。また石碑には、貞讃という坊さんが大乗妙典というお経の本を5千部読んだ記念につくられたものであることが記されています。

この宝篋印塔は、この一里塚の造られた年代がそれ以前であることを証明する資料として貴重です。



嘉永４（1851）年の古絵図に一里塚が明記されている
（田中正雄氏蔵）

23 水　郡　邸

近鉄長野線川西駅下車東南へ徒歩５分

文久３（1863）年８月15日夜、淀川を伏見（京都府）から大阪へと急ぐ２隻の船がありました。その船には中山忠光（公卿）を隊長とする一団の人々が乗り組んでいました。この一団の人々が、のちに天誅組とよばれた人々です。

一行は堺で船を降り、狭山（大阪狭山市）を通って16日には向田村（今の富田林市甲田）の水郡善之祐の屋敷にはいりました。

善之祐は文政９（1826）年旧向田村の代々、代官または庄屋をつとめる家に生まれ、彼もまた嘉永６（1853）年父のあとをついで大庄屋になりました。1853年はペリーが黒船を率いて浦賀にやってきた年です。その後、幕府はペリーの要求に押されて開国をきめましたが、開国にともなう諸物価の値上がりは、全国に武力で幕府を倒そうとする運動を激化させました。この様な倒幕尊皇攘夷派の中心になったのが下級武士や、善之祐の様な農村の大百姓たちでした。

善之祐は家の仕事を弟にまかせては、たびたび京都に行き来して倒幕派の志士たちと連絡をとりあっていました。そうして文久３年８月、中山忠光や吉村寅太郎（土佐藩）らと共に、大和（奈良県）で倒幕の兵をあげるというかねてからの計画を実行にうつしたのです。

一行が善之祐の家にはいるや、周辺の村々から20名近くの人々が続々と一行に加わるべく集まってきました。かねてから善之祐の考えに共鳴していた人々です。

一行は８月16日深夜、水郡邸を出発し、河内長野市の三日市から観心寺を経て、17日には五条（奈良県）の幕府代官所を襲撃しました。そして代官を殺し、天皇を迎えて新政府をつくろうと考えたのです。

ところが翌18日、京都で政変が起こり、尊皇攘夷派はすべて京都

水郡邸外観（南から）

父善之祐とともに天誅組に参加した
水郡英太郎長義（19歳）＜水郡庸皓氏蔵＞

から追放されてしまいました。天皇の五条行きなど望むべくもないことになってしまったのです。のみならず天誅組は幕府にそむく賊軍として追われる身となったのでした。

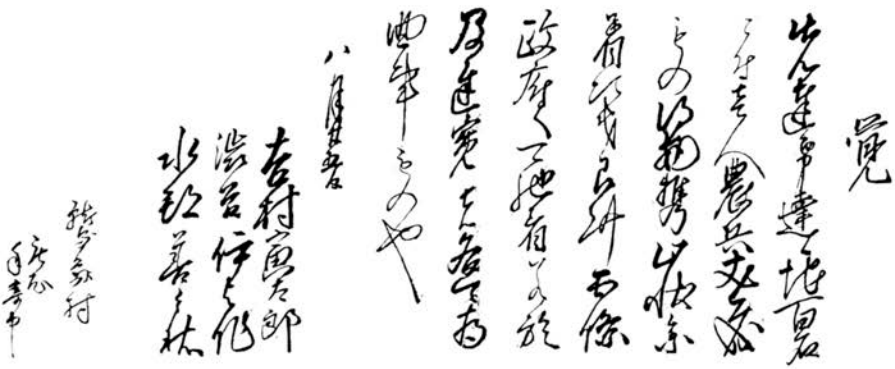
一行は十津川（奈良県）に逃げこみました。しかし幕府の命令を受けた紀州（和歌山県）藩の兵などに追われ、ある者はがけから転落し、ある者は討死し、またある者は捕えられて処刑されるなど悲惨な末路をたどりました。善之祐はこのありさまを京都に伝えようと、あえて投降し京都に送られたのち、刑場の露と消えました。

この様にして天誅組はかい滅させられたわけですが、この事件は明治維新のさきがけとして日本近代史に残る重要な事件となったのでした。一行が泊まった水郡邸は当時の姿をとどめて大阪府下でも重要な史跡となっています。また周辺の村々からはせ参じた人々の名前は錦織神社の参道のわきの石碑に刻まれています。

なお、水郡邸は安永2（1773）年に建てられたものです。

※　尊皇攘夷……天皇を中心とした政府をつくり（尊皇）、外国勢力を打ち払おう（攘夷）という思想

参考文献　「河内忠勤つづら」　林総夫著



天誅組の農兵募集書写（水郡庸皓氏蔵）

覚

先達申達候地百石
ニ付壱人農兵丈夫成
もの得物携此状参
着次第即刻五条
政府へ可馳着若於
及遅寛候者
各可為曲事もの也
八月廿五日
吉村寅太郎
渋谷伊与作
水郡善之祐
鷲家村
庄屋
年寄中

上記農兵募集書の楷書体

富田林の文化財年表

西　　暦	富田林の文化財	国内のできごと
紀元前3000年ごろ	錦織遺跡（縄文前期）	縄文文化
紀元前1000年ごろ	錦織南遺跡（縄文晩期）	
紀元前200年ごろ		弥生文化（この直前ごろから稲作始まる）
紀元　1世紀	喜志遺跡	金属器の使用
	中野遺跡	
	甲田南遺跡	
2世紀	彼方遺跡	倭国大乱
3世紀	別井遺跡	邪馬台国女王卑弥呼、魏に使者を派遣 (239)
		弥生文化このころまで
		土師器つくられる
4世紀	(後半)真名井古墳	
	廿山古墳	
5世紀	(前半)彼方丸山古墳	応神・仁徳陵古墳
	(後半)川西古墳	須恵器つくられる
6世紀	(前半)中佐備須恵器窯	
		仏教伝来 (538または552)
	(後半)五軒家須恵器窯	藤ノ木古墳
	田中古墳群	四天王寺創建 (593)
7世紀	(前半)オガンジ池瓦窯	聖徳太子摂政となる (593～622)
	新堂廃寺創建	聖徳太子十七条憲法制定 (604)
	お亀石古墳	法隆寺創建 (607)
		小野妹子遣隋使となる (607)
		聖徳太子磯長墓 (622ごろ)
		遣唐使の派遣始まる (630)
	(中ごろ)龍泉寺	大化改新 (645)
	細井廃寺	
	錦織廃寺	壬申の乱 (672)
		藤原京遷都 (694)
8世紀	(前半)畑ヶ田遺跡	大宝律令 (701)
		和同開珎鋳造 (708)
		平城京遷都 (710)
		「古事記」なる (712)
		「日本書紀」なる (720)
		難波京遷都 (744)
		平城京復都 (745)
		平安京遷都 (794)
9世紀		最澄、天台宗を開く (805)
		空海、真言宗を開く (806)
	美具久留御魂神社	応天門の変 (866)
		遣唐使の派遣を廃止 (894)
10世紀		「古今和歌集」なる (905)
		「延喜式」なる (927)
		平将門の乱 (935)
11世紀		平等院鳳凰堂落成 (1053)
		白河上皇、院政を開始 (1086)

紀元 11世紀	(末)滝谷不動明王寺		
12世紀		中尊寺金色堂建立	(1126)
		平清盛、太政大臣となる	(1167)
		壇の浦の戦、平氏滅ぶ	(1185)
		源頼朝、征夷大将軍となる	(1192)
13世紀		「新古今和歌集」なる	(1205)
	龍泉寺仁王門	「御成敗式目」制定	(1232)
	浄谷寺板碑	文永の役	(1274)
		弘安の役	(1281)
14世紀	浄谷寺石造地蔵菩薩立像		
	板持十三重層塔		
	嶽 山 城	楠正成挙兵	(1331)
		鎌倉幕府滅亡	(1333)
		室町幕府開く	(1338)
	錦織神社	四条畷の戦い、楠正成戦死	(1348)
		南北両朝合一	(1392)
		金閣寺建立	(1397)
15世紀	興正寺別院		
		興福寺東金堂建立	(1415)
		興福寺五重塔落成	(1426)
		龍安寺建立	(1450)
		応仁の乱	(1467～1477)
		山城国一揆	(1485)
		加賀一向一揆	(1488)
		蓮如、石山本願寺を創設	(1496)
16世紀			
		鉄砲伝来	(1543)
	富田林寺内町	キリスト教伝来	(1549)
		織田信長、比叡山焼打ち	(1571)
		室町幕府滅亡	(1573)
		豊臣秀吉全国統一	(1590)
		関ケ原の戦い	(1600)
17世紀		家康征夷大将軍となる	(1603)
	東高野街道錦織一里塚	五街道に一里塚を置く	(1604)
		大阪冬の陣	(1614)
		大阪夏の陣、豊臣氏滅ぶ	(1615)
		日光東照宮完成	(1636)
	(後半)旧杉山家住宅	徳川綱吉将軍となる	(1680)
18世紀		赤穂浪士の仇討	(1702)
		評定所に目安箱設置	(1721)
		享保の大飢饉	(1732)
		「解体新書」刊行	(1774)
	仲村家住宅	天明の大飢饉	(1783)
19世紀		天保の大飢饉	(1833～1839)
		大塩平八郎の乱	(1837)
		ペリー浦賀にくる	(1853)
	水郡邸(建築は1773年)	天誅組挙兵	(1863)
		大政奉還	(1867)
		大日本帝国憲法発布	(1889)
		日清戦争	(1894)

■執筆

浅野　雅美 氏
（富田林市立
金剛中学校教頭）

浅野　重遠 氏
（羽曳野市立
埴生小学校教諭）

窪　　満広 氏
（富田林市立
新堂小学校教諭）

初野　富博 氏
（富田林市立
川西小学校教諭）

福嶋　隆昭 氏
（富田林市立
彼方小学校教諭）

正垣　杉雄 氏
（富田林市立
高辺台小学校教諭）

■校閲

京都府立大学名誉教授
林野　全孝 氏

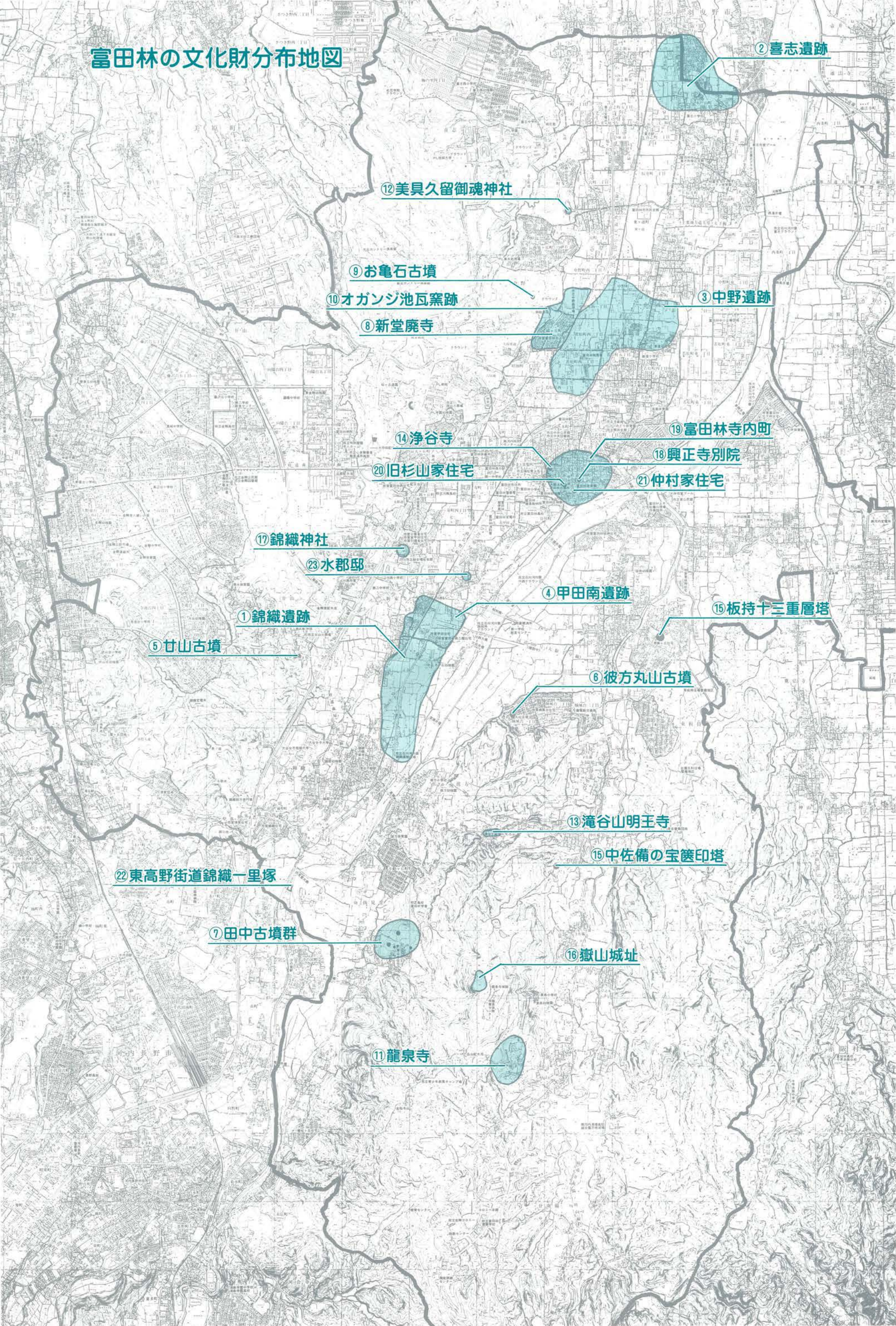
神戸商船大学教授
北野　耕平 氏

国際仏教大学教授
竹下喜久男 氏

大谷女子大学助教授
中村　　浩 氏

富田林の文化財

昭和57年３月 初版発行
平成元年３月 改訂新版発行

発行・編集　富田林市教育委員会
印刷所　株式会社関西共同印刷所

富田林の文化財分布地図